

## 親密な関係における特別観が当事者たちの 協調的・非協調的志向性に及ぼす影響

相馬 敏彦\*  
九州女子大学人間科学部

浦 光博  
広島大学総合科学研究科

### 要 約

本研究では、親密な関係における特別観が関係の相手に対する行動にどのような影響を及ぼすのかを検討した。大学生 474 名を対象とする調査研究を行った。親密な関係での特別観は関係内での協調的な志向性を高め、他方非協調的な志向性を抑制することが示された。さらに、特別観が協調的・非協調的志向性に及ぼす影響は、相互依存諸変数（代替肢の質、満足度、投資量、コミットメント）が志向性に及ぼす影響と独立したものであることも示された。これらの結果より、親密な関係に対して強い特別観をもつ者は非協調的な行動がとれないことが示唆された。親密な関係における特別観がその当事者に不適応を生じさせる可能性について議論した。

キーワード：特別観，親密な関係，協調的・非協調的志向性，排他性

### 問 題

人は恋人や夫婦といった親密な関係<sup>1)</sup>においてしばしばその関係と他の関係との境界に固執する。親密な関係をより価値ある特別なものと認識しようとしたりその特別視に基づいて行動したりすることがあるのである。このような関係の特別視は、必ずしも周囲の代替関係との具体的な成果の比較に基づくとは限らない。恋人同士が自らの関係にばかり目を向け、周囲の関係を見ようともせず、それらとの比較そのものをしなくなることはしばしば観察されることである。

従来、代替関係との比較に基づいて人が現在関与している関係を評価する過程については相互依存関係をめぐる研究で取り上げられてきた。これに対して、周囲の関係との比較を前提としない、特定の関係への固執傾向を扱った研究はほとんど見受けられない。

本研究では、このような親密な関係への特別視が関係の関与者にどのような影響を与えるのかを検討する。そのため、まず始めに先行研究を概観し、親密な関係にいる者がいかにその関係を特別なものと認識しやすいかについて詳述する。その上で、関係を特別視することが関係内で当事者のとる行動にどのような影響を及ぼすのかを検討する。その際、それらの影響過程が相互依存諸変数による影響とは独立したものかどうかを併せて検討する。

### 親密な関係における特別観

親密な関係にいる者は、その関係をより肯定的ですばらしいものとして評価しようとする。このことは、親密な関係の当事者達はその関係をどう評価するのかを検討した研究で一貫して示されている (e.g., Martz, Verette, Arriaga, Slovik, Cox, & Rusbult, 1998; Murray, Holmes, &

\* 現所属：川口短期大学ビジネス実務学科

1) 本研究で用いる「親密な関係」とは英語での“intimate relation”に対応するものであり、主に男女間の親密な関係を指す。

Griffin, 1996; Murray & Holmes, 1997; Van Lange & Rusbult, 1995)。例えば、Van Lange and Rusbult (1995) が、大学生に自身の恋愛関係と他者の恋愛関係とについて回答するよう求めたところ、被調査者は自身のもつ関係に対しては肯定的な要素を多く、逆に否定的な要素を少なく記述したのに対して、他者のもつ関係に対してはそのような偏った評価を下すことはなかった。また、Martz *et al.* (1998) も同様に、大学生に自身、親友ならびに一般的な他者の三者それぞれのもつ恋愛関係について評価させたところ、一般的な他者や親友のもつ恋愛関係よりも自身のもつ恋愛関係を高く評価したことを報告している。他にも、夫婦関係にある者たちは、一般的な恋愛関係や夫婦関係に比べ、自分たちの関係だけはどのような苦難をも乗り越えられると信じていることも報告されている (Murray & Holmes, 1997)。これらの知見はいずれも、他者のもつ関係と比較して、親密な関係にある者が自分たちの関係をより高く評価しようとすることを示している。

このように人が自身のもつ親密な関係をより高く評価しようとする傾向は、それぞれの関係の当事者間での比較だけでなく、個人内で行われるその個人のもつ関係間での比較においても生じる。その現象の一つは、代替関係に対する評価の切り下げ (devaluation) として検討されてきた (Johnson & Rusbult, 1989; Lydon, Fitzsimons, & Naidoo, 2003; Lydon, Meana, Sepinwall, Richards, & Mayman, 1999)。Johnson and Rusbult (1989) は、実験前に第三者によって極めて魅力的であると評価されている人物の写真を実験参加者に提示しそのターゲット人物の魅力について評定するよう求めた。すると、回答時に恋愛関係に強く関与していた実験参加者は、さほど関与していなかった参加者に比べ、そのターゲットに対する魅力をより低く評定した。すなわち、恋愛関係に強く関与している者はそうでない者よりも代替となりうる他者の魅力を低く評価したのである。この傾向は、自己評定という主観的な指標だけでなく、注視時間や生理的覚醒の指標においても示されることを Miller (1997) が確認している。さらに、Lydon *et al.* (1999) は、これらの知見を踏まえ、関係への関与度とターゲットの魅力とが均衡している場合に、人は代替となりうるターゲットをより低く評価することを実験的に示し、代替関係に対する評価の切り下げが元々の関係を維持させるために生じていることを明らかにした。親密な関係にある者は、現在の関係の比較対象となりうる関係が提示されても一概にそれらの代替となりうる関係の魅力を下げる傾向を、元々の親密な関係の魅力に高く維持しようとしていると

いうのである。

上述した切り下げ現象に関する知見はいずれも、代替となるかどうかの基準を外見的な魅力の次元に特定した上で見出されたものである。しかし、親密な関係の魅力構成する要素はさまざまであり (奥田, 1997)、代替となる基準もまたさまざまである。そして関係を維持する上では、特定の評価基準における魅力の高さよりも全般的な魅力の高さが重要となる。例えば、関係から得られる成果や満足がその関係の継続性を規定することを示す理論モデルでは (奥田, 1994; Rusbult, 1983)、特定の基準ではなく全般的な成果や満足の高さが継続性をより予測することを示している。これらのことを踏まえれば、代替関係に対する評価の切り下げは、さまざまな基準によって認められ、結果的に関係全般に対する価値づけにおいても認められると考えられる。

また、先ほどの代替関係に対する評価の切り下げ現象では、代替となりうる対象を未知の他者として検討を進めているが、代替対象を既知の他者とした場合にも親密な関係の関与者はしばしばその関係の価値を絶対的に高く見積もろうとする。このことは、恋愛関係に対して人々もつ態度や信念を検討した研究にみることができる。そこでは、関係の当事者達が自分たちの関係を唯一無比のものとして捉えて、自身のもつどの関係よりも恋愛関係を重要なものと感じる者のいることが繰り返し報告されている (Franiuk, Cohen, & Pomerantz, 2002; Sprecher & Metts, 1989; 和田, 1994)。例えば、日本人大学生を対象とした和田 (1994) は、恋愛関係に対してもつ態度の一つとして恋愛至上主義があることを指摘し、その測定項目に「恋愛はあらゆる関係の中でもっとも重要なものである」を含めて実証的な検討を行っている。このように、親密な関係の関与者はその関係の価値を絶対的に高く評価しようとすることがあるのである。

以上のことから、対人関係の価値を特定の評価領域にかかわらず全般的に判断する上で、親密な関係にある者はその関係を絶対的に高く価値づけやすいといえる。具体的にいえば、恋愛関係や夫婦関係にある者はその関係を特別に価値あるものだ、かけがえのないものだと思いがちだということである。そこで、本研究では、このように特定の関係にある者がその関係を絶対的に高く価値づけようとする傾向を特別観 (perceived distinctiveness) と定義し、この特別観が特別視した当事者の行動にどのような影響をもたらすのかを明らかにする。親密な関係の関与者がその関係を絶対的に高く価値づけやすいということは、その反面として自身のもつ他の関係を評価する場合にそれらを一概に低く価値づける態度とも密

に関連するだろう。よって、それらのことが当事者の行動に及ぼす影響を検討する。

#### 親密な関係での特別観が関係内での行動に及ぼす影響

親密な関係を特別視することは、そこにいる当事者にとってどのような効果をもたらすだろうか。本研究では、協調的・非協調的志向性の枠組みを用いて、特別観がそれらの行動に及ぼす影響を検討する。それは、親密な関係においては協調的な行動と非協調的な行動の両方をとることが、関係にいる当事者の適応水準を高く保つ上で重要となるためである（深澤・浦・相馬，2003；相馬・深澤・浦，2004a；相馬・落合・深澤・浦，2004b）。

協調的・非協調的志向性とは、二者関係において相手の出方に応じた行動のとりやすさを意味する概念であり、二つの因子から構成される。相手が協力的な態度を示した場合に自身も協力的な態度や行動をとりやすいかどうかを意味する協調的志向性と、相手が非協力的な態度を示した場合に自身も非協力的な態度や行動をとりやすいかどうかを意味する非協調的志向性である（相馬・浦，2001）。これら2つの志向性は、相手のとった態度や行動が異なる場面での行動のとられやすさを意味しているため概念的に独立した志向性であり、このことは因子分析や相関分析の結果によって確認されている（深澤ら，2003；相馬・浦，2001；相馬ら，2004b）。また、志向性の妥当性に関する検討では、これらの志向性が個人特性ではなく、対人関係での関わり方を反映したものであることも確認されている（相馬・浦，2001）。

一般に、親密な関係においてはその進展とともに葛藤や対立が生じやすくなるが（Argyle & Furnham, 1983；松井，1990）、その葛藤の深刻化を防ぎ関係からより多くの利益を得るために、当事者達が協調的・非協調的志向性のそれぞれを高くもつことが効果的である（深澤ら，2003；相馬ら，2004a, 2004b）。協調的な行動は相手の言動に対する賞として、非協調的な行動が相手の言動に対する罰として機能する結果、相手から否定的な言動を受ける危険性が抑制されるためである。例えば、社会人を対象とした縦断的な調査では、調査開始時点で協調的志向性と非協調的志向性のそれぞれを高くもつことが後の時点における相手からの間接的暴力（暴言や行動の制限といった主に心理的な暴力）の抑制に効果をもつことが確認されている（相馬ら，2004a）。このように、親密な関係が潜在的にもつ否定性を予防する上で、関係にいる当事者が協調的・非協調的な志向性をもつことは極めて重要である。そこで、本研究では、関係への特別観がこれら協調的な志向性と非協調的な志向性に及ぼす影響につ

いて検討する。特別観は両志向性に対して以下の効果をもつことが予想される。

協調的志向性については、特別観の高さによって促進されると考えることができる。それは、先行研究において、関係に対して排他的な意識を強くもつ者ほど相手に対して援助や支援をしようとすることが示されており（e.g., Davis, 1985；Hendrick & Hendrick, 1989；Rubin, 1970）、それらの援助や支援行動は協調的な行動と強く関連すると考えられるためである。Rubin (1970) は、愛情と好意の区別について議論する中で、愛情とは「援助傾向」と「排他性と一体感」という要素が密接に結びついた感情であると論じ、排他的な意識が強いほど関係の相手に対する援助傾向も強いことを示唆している。そして実際に、Hendrick and Hendrick (1989) は、愛情の要素を測定するいくつかの尺度を探索的に因子分析し、排他的な意識と相手に対する支援の要素とが同一の因子に同じ方向性で負荷することを見出している。これらの研究は、ある関係に対して排他的な意識が強い者ほどその相手に対して援助や支援をとりやすいことを示している。排他的な意識が強い、つまりある関係を保持する上で部外者との関わりを抑制しようと考えがちだということは、絶対的に元々の関係を高く価値づけようとすることを反映しているだろう。また、上述の先行研究で検討されてきた援助や支援といった行為は、相手の幸福に対する気遣いを基調とした行動を意味しており（長田，1990）、相手をいたわったり賞賛したりするという協調的行動とも密接に関連する。したがって、親密な関係に対する特別観が強いほどその相手が協力的な場合により協力的行動をとりやすくなる、すなわち特別観が協調的志向性を促進すると予測することができる。

この協調的志向性に関する予測とは逆に、非協調的な行動は特別観によって抑制されると予測できる。特別視した関係を絶対的に高く価値づけることは、その一方でそれ以外の関係の価値づけを判断する場合におしなべてそれらを低く見いだそうとする態度と結びつくと考えられる。するとそれらの結びつきの結果がそれぞれの関係から入手可能な資源に対する価値づけ、ひいてはその資源を入手しようとする個人の動機づけの程度にも影響し、結果的に関係に対して強い特別観を示す個人ほどその関係の外部からのサポート取得に強い抵抗を感じると考えられる。そのように親密な関係の外部からサポートを取得できない場合、人は関係内で生じた葛藤に対する適切な対処を抑制しがちである。例えば、それまでの恋愛・夫婦関係の継続期間の長さから建設的な対処が望ましい場合であっても、外部からのサポート取得が

できない者たちは対話による対処行動を抑制してしまうことが示されている(相馬・山内・浦, 2003)。進展した関係の相手の態度によって不快な思いを経験した場合、関係外部の他者からのサポートが利用できない者は、積極的に相手の態度に反論したり非難したりすることができないと考えられるのである。このような積極的に反論したり批判したりする行動は非協動的志向性とも密に関連すると考えられ、実際に、関係外部からのサポートの利用可能性の低さが親密な関係内での非協動的志向性を抑制することも示されている(相馬ら, 2004b)。したがって、親密な関係における特別観は、相手の非協力的態度に対して非協力的な態度を示し返すことを抑制する、すなわち非協動的志向性を低めるだろうと予測される。

このように特別観は協動的志向性を高める一方で、非協動的志向性を低めるよう機能すると考えられる。なお、恋愛関係をより重要で唯一無二な関係だとみなす信念の強さに個人差が見られたように(Frauiuk *et al.*, 2002; 和田, 1994)、親密な関係に属する者の中でも、自身の関係をより特別視しやすき者もいればそうでない者もいると考えられる<sup>2)</sup>。とすれば、特別観によって非協動的志向性が抑制されることはとりわけ親密な関係に強い特別観をいだく当事者に重大な結果をもたらさう。なぜなら、先述した通り、強い特別観をもつ者の方が、そうでない者よりも非協動的志向性が抑制されることによって彼らの親密な関係が否定的なものになる危険性が高いためである(深澤ら, 2003; 相馬ら, 2004a, 2004b)。安心の源(secure base)として当事者に肯定的な効果をもたらす(Bowlby, 1973)はずの親密な関係が、その特別観ゆえに当事者に否定的な効果をもたらす可能性があるのである。そこで、本研究では、そもそも本当に特別観が協動的・非協動的志向性に影響するのかを、個人間での恋愛関係に対する特別観の程度のばらつきに焦点をあてて検討する。

仮説1 恋愛関係における特別観の高さは、協動的志向性を高め非協動的志向性を低めるだろう。

### 特別観と相互依存諸変数の異同

これまで述べてきたとおり、特別観は協動的・非協動的志向性を規定する要因の一つであると考えられる。もっとも、これ以外にも親密な関係での協動的・非協動的行動を規定する要因は考えうる。とりわけ、親密な関

係での相互作用から個人が実際にどのような成果を得ているか、あるいは得ていると感じているかは、関係内での個々人の行動を規定する可能性がある。相互依存のあり方(Thibaut & Kelley, 1959)が、協動的・非協動的志向性にも影響する可能性を指摘できるのである。そうであれば、特別観という概念をとりあげその機能を検討しようとする上で、相互依存に関する諸変数と特別観との概念的な異同、ならびにその機能的差異について議論することは重要である。もし、特別観によって説明される事象が、相互依存諸変数によっても同様に説明されるならば、特別観という新たな概念の導入は何の生産性ももたらさず、かえって概念の混乱をもたらすだけだからである。そこで、以下にこの問題について詳述する。

Thibaut and Kelley (1959)の相互依存理論によると、親密な関係にいる者は次の二つの基準に基づいて関係から得た成果の適切さを評価し、関係への満足度や関係を持続させようとするかどうかの意思を変化させる。関係から得る成果が個人のもつ比較水準を上回っているほど関係により満足を感じ、選択比較水準を上回っているほど関係を持続させようとするというのである。比較水準とは、「いかなる関係においても適当であると人が判断できる正の成果の最小値」であり、選択比較水準とは「他の選択肢を考慮した場合に人が受容する最小の成果」として定義される(Thibaut & Kelley, 1959)。相互依存理論では、これら二つの枠組みによって人は自身の所属する関係の成果を評価し、それに基づき関係内での行動を決定しているという。

他方、特別観も関係に対する評価を反映した概念であり、また先述した仮説のようにそれは関係での当事者の行動に影響すると考えられる。したがって、相互依存に関する諸変数と特別観とはともに、所属する関係に対する評価に関わる概念であり、かつその関係での相互作用に何らかの影響を及ぼさうという点で一致している。特に、特別観と相互依存理論における選択比較水準とは、いずれも属する関係とそれ以外の関係での評価差に関する概念だという点で内容的に極めて類似している。しかしながら、特別観はあくまでも特定の関係を絶対的に評価しようとする傾向でありその反面として特別視した関係とそれ以外の関係を比べ合わせることなく一概に後者を低く評価する態度を導きうるのに対して、選択比較水準は複数の関係間での比較に基づく具体的な評価の結果を指している。いいかえれば、特別観とは、どの程度

2) このように特別観の程度は個人差によって捉えられる一方、後述の予測1のように、親密な関係の全般的な特徴を反映したもの、すなわち関係性によって影響されるものとしても捉えることができる。

魅力的な代替関係をもつのかにかかわらず、現在の関係を特別に価値あるものだとみなそうとする傾向を指すのに対し、選択比較水準は、実際に代替関係が現在の関係に比べてどの程度魅力的なのかという具体的な比較の結果を意味しているのである。よって、概念的にはこれらの特別観と選択比較水準とは異なるものだとはいえる。たとえ現在の関係をかけがえのない特別なものだと考えていないからといって周囲に現在の関係に代わるほど魅力的にみえる関係があるとは限らないし、また逆に、周囲には代替となるほど魅力的な関係がないからといってそのことから直ちに当事者が現在の関係を特別視しているとはいえないのである。同様に、比較水準もまた、具体的な評価を反映した概念であり特別観とは異なるものだとはいえる。現在の関係にどの程度満足しているかということと関係を特別なものだと捉えようとするとは少なくとも概念的には独立したものである。これらのことから、特別観と相互依存に関する諸変数とは概念的に異なったものだとはいえる。

Rusbult (1983) は、この相互依存理論を基盤として親密な関係を説明する投資モデルを提唱し検討を重ねている (Rusbult, 1983; Rusbult, Johnson, & Morrow, 1986)。それによると、恋愛関係に対する継続意思は、投資量、満足度、代替肢の質の3要因によって規定される。投資とはそれまでに関係に費やした資源の量を、満足度はその関係から感じる満足の程度を、代替肢の質は現在の関係から別の関係に移行した場合にどのような利益あるいは損失を受けるかを意味している (Rusbult *et al.*, 1986)。これまでに、これらの相互依存変数によって関係内でのさまざまな行動が規定されることが示されている (e.g., Drigotas, Rusbult, & Verette, 1992; Simpson, 1987)。このことから、これらの相互依存変数もまた協調的・非協調的な志向性に対して何らかの影響を及ぼす可能性が考えられる。例えば、関係に対して不満を感じている者ほど、相手に対して親切にすることが少なかつたり意味もなく相手を非難したりしがちである可能性が考えられる。

ただし、相互依存変数が協調的・非協調的な志向性に何らかの影響をもつとしても、それは特別観による影響とは独立しているだろう。先に述べたように、特別観と相互依存変数とは概念的に異なるものだからである。特別観とは、自身のもつ対人関係を評価する上で、ある関係を絶対的に高く評価する傾向を意味しその反面としてそれ以外の関係への評価が一概に低くなる態度と関連するものの、それは必ずしも具体的な評価に基づくものではない。一方、相互依存変数は、所属する関係にどの程度投資し、どの程度満足を感じており、属する関係と別の

関係を比較した場合に後者の関係がどの程度代替となるのか、そして関係をどの程度継続したいと思っているのかという具体的な評価に基づくものである。よって、特別観と相互依存変数とが協調的・非協調的な志向性に及ぼす影響もまた独立したものと考えられる。そこで、本研究では特別観とこれら相互依存諸変数とが協調的・非協調的な志向性に対してもつ効果の独立性についても検討する。具体的には、次の仮説について検証する。

仮説2 恋愛関係において特別観の高さが協調的・非協調的な志向性に及ぼす影響は、相互依存諸変数が志向性に及ぼす影響を統制しても認められるだろう。

#### 本論文の構成と妥当性の検証

本論文の主たる目的は、上述した二つの仮説の検討を通じて恋愛関係における特別観が協調的・非協調的な志向性に及ぼす効果を詳細に理解することである。そこで、特別観を測定する尺度を開発し、予めその妥当性の検証を行った上で、仮説の検証を行う。

これまでの議論から明らかなように、関係に対する特別観は親密な関係に対して顕著であることが予想できる。そこで、特別観尺度の妥当性に関する第一の検討では、友人関係と恋愛関係それぞれに対する特別観を比較し、前者よりも後者に対して当事者が高い特別観をもつことを確認する。本研究の検討対象である大学生では、恋人との関係をもたなくても友人関係をもつことは一般的であるという実情を考慮し、本研究では、恋愛関係にない者が異性の友人との関係に対してもつ特別観と、恋愛関係にある者がその関係に対してもつ特別観、ならびに既に恋愛関係にある者が恋人以外の異性の友人との関係に対してもつ特別観それぞれの高さの比較を行う。この操作によって、特別観の高さが恋愛関係か友人関係かという関係性の違いによって異なるのか、あるいは恋人の有無に反映されうる関係性以外の要因によって異なるのかを明らかにすることが可能となる。これまでの議論から、特別観の高さはあくまでも関係性の違いによって異なると予想され、恋人がいるかどうかにかかわらず当事者は友人関係よりも恋愛関係に対して強い特別観をもつと予測できる (予測1)。

また、ある関係に対して特別観を強くもつということは、特別視した関係の価値を絶対的に高く見積もる反面、照査することなくそれ以外の関係に対する価値づけを一概に低く見積もることと結びつくといえる。そのような個々の関係に対する価値づけは、それぞれの関係から入手可能な資源に対する価値づけにも影響し、結果として

その資源を入手しようとする個人の動機づけの程度にも影響するだろう。したがって、ある関係を強く特別視するほど、特別視した関係よりもそれ以外の関係からサポート取得しようとすることへのためらいが強くなると予想される。そこで、特別観尺度の妥当性に関する第二の検討においては、個人のもつネットワークのうち、特別視した関係とそれ以外の関係とでのサポート取得しようとする程度に差があるかどうか、すなわちサポート取得の排他性<sup>3)</sup>に焦点をあてて検証を行う。具体的には、個人によって他者へのサポート取得の程度が異なるため、特別視する関係の相手へのサポート取得の抵抗感を基準として、その得点をそれ以外の他者へのサポート取得の抵抗感得点から減算したものをサポート取得における排他性得点として検討に用いる。なお、これまでも述べたように、ある関係を特別視することでそこからのサポート取得よりも外部からの取得を抑制しようとするのは、特別視した関係と外部の関係との価値づけに絶対的な差が見出されるためであり、外部の関係に対する個別的な評価によるのではないと予想される。そこで、本研究では、外部の関係に対する個別的な評価を表す変数として得られるサポートの有効性を取り上げ、その有効性がサポート取得における排他性に及ぼす影響を統制した上でなお、特別観がサポート取得における排他性に影響を及ぼすことを検討する。外部の関係を高く評価しておりそこから得られるサポートを有効だとみなしている者ほど全体的にサポート取得において排他的になりにくいと考えられるものの、その影響過程は特別観がサポート取得における排他性に及ぼす影響と独立しているとは予想できない(予測2)ためである。

## 方 法

**調査協力者** 大学生 474名(男性 224名, 女性 245名, 不明 5名, 平均年齢 19.7歳 ( $SD=1.55$ ))を対象とした。

**手続き** 講義時間内に質問紙を配布し回収した。

**質問紙** 質問紙は表紙と下に示す尺度によって構成された。表紙には研究の目的と回答に当たっての注意点が記載されていた。

始めに調査協力者には、以下で述べる尺度に回答する前に、①特定の異性との関係、および②それ以外の知人あるいは友人との関係について、具体的に①と②それぞ

れに該当する1名の合計2名をあげるよう求めた。

①の異性との関係については2パターンの質問内容を用意し、回答者はいずれか1パターンに回答した後に②の知人あるいは友人との関係に関して同内容の質問に回答するよう求められた。①の質問内容を二つのパターンに分けたのは、予測1を検証するため、すなわち関係に対する特別観の高さが回答者の恋人の有無ではなく回答の対象が恋愛関係か友人関係かによって異なるかを確認するためである。2パターンのうちの一つでは、回答時に恋人がいればその恋人との関係を①の回答対象とし、回答時に恋人がいなければ異性で最も親しい友人との関係を①の回答対象とし答えるよう求めた。もう一つのパターンでは、回答時に恋人がいるかどうかにかかわらず、最も親しい異性の友人との関係を①の回答対象として答えるよう求めた。後者のパターンの質問紙には、恋人の有無を問う項目が含まれた。上記の操作により回答者は次の3群のいずれかに分類される。①の特定の異性として、恋人がいてその恋人について回答した群、恋人がいるにもかかわらずその恋人以外の異性の友人について回答した群、恋人がおらず異性の友人について回答した群の3群である。いずれのパターンの質問紙においても、対象者を具体的にイメージさせるため、対象人物のイニシャルと交際期間を記述させた。上記の2パターンの質問紙はランダムに配布され、異性関係の同定に関わる質問以外の項目については両パターンの構成は同様であった。

②の特定の異性(恋人か友人)以外の知人あるいは友人について、①であげた人物以外で「昨日一番初めて出会った同世代の知人あるいは友人」と教示した上で回答を求めた。このように教示したのは、ここであげられる他者が極めて親しい他者に偏らないためである。知人や友人についても対象者を具体的にイメージさせるため、対象人物のイニシャルと交際期間とを記述させた。なお、ここでの知人や友人には家族を含めないように求めた。

質問紙に含まれた尺度は次の通りである。

### 1) 異性との関係における特別観

異性関係における特別観の程度を問う3項目(独自に作成、「私にとってパートナーとの関係は特別な関係である」、「私が何らかの問題を抱えた時に、パートナーからのアドバイスはパートナー以外の人からのアドバイスよ

3) ここでは排他性を、相馬・浦(2007)を参考に、特定の関係にある者がそれ以外の関係の相手からのサポート取得に抵抗を感じる程度として捉える。また、排他性はサポート取得も含めた関係内外の他者に対する具体的な関わり方を指す概念であるのに対して、特別観は特定の他者への評価を指す概念であり排他性の程度を規定するものであるといえる。

りも意味がある」,「私が悩んでいる時に,パートナーから励まされることはパートナー以外の人からの励ましよりも意味がある」)について,それぞれ「全くあてはまらない」(1点)から「非常によくあてはまる」(9点)までの9件法で回答するよう求めた。

後者の2項目はサポートに関連した内容が含まれるものの,それらはサポートという身近な対人資源を,特別視した対象とやりとりすることとそれ以外の他者とやりとりすることの価値づけの違いを尋ねるものであり,そこには対象となる関係間での評価差が反映されることができると考えられる。また,それらが測定しようとするものが関係間での比較に基づく具体的な評価差であれば,「パートナー以外の人」として評価の高い相手を想定することもあれば評価の低い相手を想定することもあるといえ,たとえ回答者がパートナーとの関係を特別視していたとしても必ずしもこれらの項目への反応得点が高まるとはいえない。これらの項目への反応得点の高さはあくまでもパートナーとの関係を絶対的に高く評価する態度を反映すると考えることができるため尺度に含めた。このように考えることの妥当性は後述する信頼性係数の高さによって確認する。

#### 2) それぞれの関係におけるサポート取得の抵抗感

異性関係,およびそれ以外の知人あるいは友人との関係それぞれにおけるサポート取得の抵抗感を尋ねた。具体的には,相馬・浦(2007)より,知覚されたサポート取得の抵抗感尺度を引用した。この尺度は,7つのサポート行為(「悩みや愚痴を聞いてもらう」,「以前,似た状況をその人物がうまく切り抜けたときの経験談を話してもらう」,「励ましてもらう」,「問題解決のため,有効なアドバイスや情報を与えてもらう」,「その時の自分の気持ちを理解してもらう」,「自分の能力・適性について,客観的な情報を与えてもらう」,「問題解決のため,現実的な手助けや支援行動をしてもらう」)に関して,被調査者がそれぞれの関係の相手からそれらの行為をしてもらうことにどれくらいためらいを感じるかの程度を問うたものであり,回答は「全くためらいを感じない」(1点)から「かなりためらいを感じる」(9点)までの9件法で求めた。被調査者は,対人関係において問題が生じサポートを必要とする状況(家族や親友との人間関係における深刻な問題が生じた状況)を想定した上でこの尺度に回答した。この状況を設定した理由は,課題的な問題が生じた状況に比べて情緒的な問題が生じた状況では,人は誰からサポートを求めるかについて選択的になりやすいためである(相馬・浦,2002)。

#### 3) 知人あるいは友人から取得できるサポートの有効性

知人あるいは友人から得られるサポートの有効性を測定した。具体的には,調査協力者が先に挙げた知人あるいは友人から取得するサポートの有効性の知覚について,有能性,情緒的有効性,道具的有効性の3側面から測定した。有能性とは,2)と同一の7つのサポート行為について,対象人物が「能力をどの程度もっているか」を問うものである。情緒的有効性は,7つのサポート行為について対象人物からサポートを取得することが「その時のあなたの情緒的な混乱を沈める上でどの程度有効だと思うか」を問うものであり,道具的有効性とは,「実際に問題解決を進める上で,どの程度有効だと思うか」を問うものである。有能性についてはそれぞれ「全く能力がない」(1点)から「優れた能力がある」(9点)までで,情緒的有効性と道具的側面については「全く有効でない」(1点)から「非常に有効である」(9点)までのいずれも9件法で回答を求めた。

#### 4) 恋愛関係における協調的・非協調的志向性

相馬・浦(2001)より,協調的・非協調的志向性尺度を用いた。尺度は,それぞれの志向性各10項目(協調的志向性,「相手の優れた能力に対しては素直に賞賛の意を示す」,「相手に相談にのってもらったときには,礼を言うのを忘れないようにしている」など,非協調的志向性,「相手にいやなことを言われたら言い返すようにしている」,「相手の言動が自分のポリシーに反するものだったとき,反論する」など),合計20項目から構成されていた。相馬・浦(2001)は,予備調査によって尺度を作成した上で,作成された尺度の信頼性と妥当性を確認している。それぞれの項目について,普段の関係でどの程度とるのかについて,「全くあてはまらない」(1点)から「非常によくあてはまる」(9点)までの9件法で回答するよう求めた。

#### 5) 恋愛関係における相互依存変数

Rusbult, Martz and Agnew (1998)の投資モデル測定尺度の邦訳版(中村,2002)を用いた。この尺度は,関係満足度5項目(「私は相手との関係に満足を感じている」,「相手との関係は私をととても幸せにしてくれる」など),投資量5項目(「相手との関係が終わったら,私が費やした多くのものは失われてしまうと感じる」,「他の誰よりも,私はかなり多くのことを相手との関係に費やしている」など),代替肢の質5項目(「相手以外の誰かと関わりを持つことを非常に求めている」,「相手以外の人との関係が私にとっては魅力的だ」など),コミットメント7項目(「私は相手との関係が長く続くことを望んでいる」,「私は何年間か先まで相手との関係を想像することが可能だ」など)の下位因子によって構成されている。Rusbult

et al. (1998) では、投資モデルに関する先行研究の知見に基づき項目を選定した上で、三つの研究によってこの尺度が高い信頼性と妥当性を備えもつことを確認している。また、問題で述べたように、投資モデルは相互依存理論に基づいて現実の関係の継続性を説明しようとするモデルである。よって、この尺度を相互依存の程度を測定する尺度として用いることは妥当であると考えられる。

## 結 果

上記の教示の結果、該当する異性がない、あるいは無回答であった8名を除くと、恋人がいて恋人との関係について回答した者95名（男性34名、女性60名、不明1名、平均年齢20.00歳、以下では恋人あり一恋愛関係群とする）、恋人がいて恋人以外で最も親しい異性との友人関係について回答した者63名（男性23名、女性40名、平均年齢20.00歳、以下では恋人あり一友人関係群とする）、恋人がいなくても最も親しい異性の友人関係について回答した者308名（男性163名、女性143名、不明2名、平均年齢19.43歳、以下では恋人なし一友人関係群とする）であった。それぞれの交際期間について、恋人あり一恋愛関係群の交際期間は平均18.21ヶ月（ $SD=23.47$ ）、恋人あり一友人関係群では平均46.70ヶ月（ $SD=55.95$ ）、恋人なし一友人関係群では平均34.41ヶ月（ $SD=43.25$ ）であった<sup>4)</sup>。

### 特別観尺度の妥当性の検証

特別観尺度について、探索的因子分析（主因子法）を行ったところ1因子構造が妥当であると判断できたため、信頼性係数を算出したところ $\alpha=.85$ と十分に高い値

が得られた。そこで、全項目の平均点を算出しそれを尺度得点とし、全ての調査協力者を対象として次の二つの検討を行った。

始めに、予測1について、すなわち異性関係における特別観が友人との関係よりも恋愛関係において強いかどうかを検討するため、特別観の高さを従属変数、回答対象の関係性の違い（恋人あり一恋愛関係群・恋人あり一友人関係群・恋人なし一友人関係群；被調査者間）を独立変数とする分散分析を行った。その結果、有意な主効果が認められた（ $F(2, 462)=48.24, p<.01, \eta^2=.17$ ）。下位検定（Bonferroni法）の結果、Figure 1に示すように恋人がいるかどうかにかかわらず、恋愛関係に対してその当事者が高い特別観をもつことが示された。

次に、予測2について、特別観とサポート取得における排他性との関連性を検討した。異性との関係におけるサポート取得抵抗感に関して、探索的因子分析（主因子法）を行ったところ、1因子構造が妥当であると判断できたため、それぞれの項目を用いて平均点を算出し、それを内部サポート取得得点として用いた（ $\alpha=.89$ ）。同様に、知人ならびに友人<sup>5)</sup>におけるサポート取得抵抗感に関して、探索的因子分析（主因子法）を行ったところ、1因子構造が妥当であると判断できたため、それぞれの項目を用いて平均点を算出し、それを外部サポート取得得点として用いた（ $\alpha=.96$ ）。そして、後者の得点から前者の得点を減算し、サポート取得における排他性得点を算出した。この得点はそれが高いほど内部に比べて外部からのサポート取得を抑制することを意味する。また、知人あるいは友人からのサポート取得の有効性それぞれに関して、探索的因子分析（主因子法）を行ったところ、それぞれ1因子構造が妥当であると判断できた。そこで、

- 4) 関係性の違いにより交際期間が異なるのかについて分散分析を行ったところ、関係性の違いによる有意な主効果が認められ（ $F(2, 462)=9.76, p<.01, \eta^2=.04$ ）、恋人あり一恋愛関係群が（ $M=18.21$ ）、恋人あり一友人関係群（ $M=46.70$ ）と恋人なし一友人関係群（ $M=34.41$ ）のいずれよりも交際期間が短かった。そこで、特別観と特別視した関係の交際期間との相関を求めたところ有意な関連性（ $r=-.07, ns$ ）は示されなかった。また、予測1と同様の分析に交際期間を共変量として投入したところ、それは共変量として有意な主効果は示さず（ $F<1$ ）、さらにFigure 1と同様に関係性の違いによる主効果が認められた（ $F(2, 462)=48.24, p<.01, \eta^2=.17$ ）。よって、予測1の結果が交際期間との交絡によって認められた可能性は極めて小さいといえる。なお、後の仮説1の検討においても、交際期間を共変量に投入した共分散分析を行ったところ、それは共変量として有意な主効果は示さず（ $F<1$ ）、Figure 2と同様の交互作用効果が認められている（ $F(1, 90)=11.83, p<.01, \eta^2=.12$ ）。よって、仮説1の結果が交際期間との交絡によって認められた可能性も極めて小さいといえる。
- 5) 挙げられた知人あるいは友人との親しさは1点から9点の範囲で6.6点（ $SD=1.9$ ）、平均交際期間は26.0ヶ月（ $SD=34.3$ ）であった。これらの親しさと交際期間のいずれの指標においても、恋人あり一恋愛関係群、恋人あり一友人関係群、恋人なし一友人関係群の3群間で有意な差は認められなかった（ $ns$ ）。

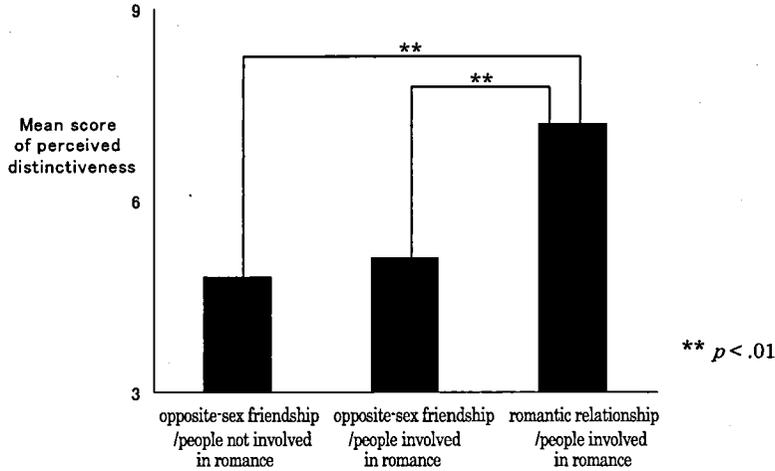


Figure 1. Perceived distinctiveness as a function of relationship status ( $n=465$ )

Table 1  
Zero-order correlation coefficients between variables included multiple regression analysis

	1	2	3	4	5	Mean	SD
1 exclusive support taking						-0.34	2.15
2 perceived distinctiveness	0.28**					5.37	2.26
3 ability of support outside opposite-sex relationships	-0.07	0.11*				6.10	1.58
4 emotional effectiveness of support outside opposite-sex relationships	-0.17**	0.08	0.66**			6.26	1.77
5 instrumental effectiveness of support outside opposite-sex relationships	-0.11*	0.07	0.66**	0.83**		5.96	1.77
6 support taking inside opposite-sex relationships	-0.49**	-0.37**	-0.15**	-0.15**	-0.20**	3.20	1.63

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

Table 2  
Exclusive support taking as a function of perceived distinctiveness of the relationships

	<i>b</i>	<i>t-value</i>	<i>df</i>	<i>p-value</i>	<i>VIF</i>
perceived distinctiveness	0.31	6.87	424	0.01	1.01
emotional effectiveness of support outside opposite-sex relationships	-0.19	4.10	424	0.01	1.01

Note.  $F(2, 424)=30.10, p < .01, Adj.R^2=.12, n=427$

有能性 ( $\alpha=.91$ ), 情緒的有効性 ( $\alpha=.94$ ), および道具的有効性 ( $\alpha=.92$ ) それぞれにおいて該当項目の平均点を算出し, それを外部サポートの有能性, 情緒的有効性, 道具的有効性に関する得点として用いた。

そして, 予測2について検討するため, サポート取得の排他性を基準変数, 特別観, 外部サポートの有能性,

情緒的有効性, 道具的有効性を説明変数とする重回帰分析 (ステップワイズ法<sup>6)</sup>) を行った。用いた変数それぞれの平均値と標準偏差, ならびに変数間の0次相関をTable 1に示す。

重回帰分析の結果, Table 2に示すように, 外部から得られるサポートの情緒的有効性による影響を統制して

Table 3  
Zero-order correlation coefficients between variables included multiple regression analysis

	cooperative orientation	uncooperative orientation	perceived distinctiveness	commitment	satisfaction	investment	Mean	SD
cooperative orientation							7.19	0.96
uncooperative orientation	-0.41**						4.33	1.11
perceived distinctiveness	0.48**	-0.38**					7.21	1.32
commitment	0.36**	-0.29**	0.45**				6.02	1.07
satisfaction	0.38**	-0.36**	0.42**	0.60**			6.87	1.53
investment	0.17	0.18†	0.38**	0.22*	0.22*		5.51	1.98
comparison level for alternatives	-0.39**	0.37**	-0.30**	-0.29**	-0.53**	-0.15	3.71	1.55

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

も、異性との関係に対して強い特別観をもつほど当事者はその関係からよりサポートを得ようとし逆に外部の関係からあまりサポートを得ようとはしないことが示された。

以上のことから、本研究で用いた特別観尺度が妥当性をもつことが確認された。

#### 仮説の検証

異性関係における協調的・非協調的志向性に関して、潜在因子との関連が弱い3項目を削除した上で確認的因子分析を行ったところ、2因子構造であることが確認された( $GFI=.92, AGFI=.89, CFI=.86, RMSEA=.07$ )。よって、それぞれの項目を用いて平均点を算出し、それらを協調的志向性( $\alpha=.78$ )と非協調的志向性( $\alpha=.63$ )の得点として用いた。異性との関係における相互依存変数に関して、Rusbult *et al.* (1998) の下位因子の通り、関係満足度( $\alpha=.86$ )、投資量( $\alpha=.85$ )、代替肢の質( $\alpha=.76$ )、コミットメント( $\alpha=.87$ )それぞれの項目を用いて平均点を算出し、尺度得点として用いた。恋愛関係の諸尺度の平均値と尺度間の関連性を Table 3 に示す。なお、協調的志向性と非協調的志向性に有意な関連性が認められなかった先行研究の知見(相馬・浦, 2001; 深澤ら, 2003; 相馬ら, 2004a) と異なり、本研究ではこれらの志向性間

に有意な負の関連性が認められた( $r=-.41, p<.01$ )。この理由については考察において詳述する。

問題で述べたように、本研究の主たる関心は、親密な関係に対する特別観の相対的な違いが関係内での協調的・非協調的志向性に及ぼす影響を明らかにすることである。そこで、恋人あり—恋愛関係群の95名を対象として次の仮説検証の分析を行った。

仮説1について検討するため、恋愛関係における特別観得点に関して、中央値(7.50点)折半によって、調査協力者を特別観低群( $N=46, M=6.13, SD=1.07$ )と高群( $N=49, M=8.21, SD=0.49$ )とに分類した( $t(62)=12.04, p<.01$ )。次に、協調的・非協調的志向性得点それぞれの標準化得点を算出した。これは、特別観が協調的・非協調的志向性に及ぼす交互作用効果を検証する上で、協調的志向性と非協調的志向性の違いによる志向性の主効果の影響を反映させにくくするためである。すなわち、概念的に独立したものである志向性間での分散が全体の分散の算出に含まれないようにするため、標準化得点を用いた。そして、志向性の標準化得点を従属変数として、特別観の高さ(高・低;被調査者間)×志向性の違い(協調的志向性・非協調的志向性;被調査者内)を独立変数とする分散分析を行った。その結果、特別観の高さ×志向性の違いの2要因交互作用効果が認められた( $F(1, 91)$ )

6) 本研究では予測2と後述の仮説2の検証に際して、多重共線性の問題を回避するため、ステップワイズ法を選択した。実際、強制投入法によって予測2の検証を行うと、特別観はサポート取得の排他性を有意に予測するものの( $\beta=.31, p<.01, VIF=1.01$ )、他の説明変数間での最大VIF値は3.41であった。仮説2の検証においても、強制投入法を用いた場合、特別観は協調的志向性( $\beta=.36, p<.01, VIF=1.48$ )と非協調的志向性( $\beta=-.38, p<.01, VIF=1.48$ )をそれぞれ有意に予測するものの、VIFの最大値は2.10であった。

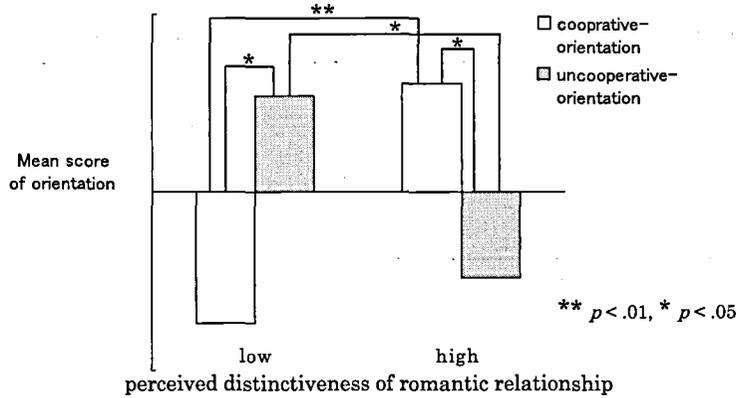


Figure 2. Cooperative and uncooperative orientation as a function of perceived distinctiveness of romantic relationship ( $n=93$ )

Table 4  
Cooperative orientation as a function of perceived distinctiveness and variables of interdependence

	<i>b</i>	<i>t-value</i>	<i>df</i>	<i>p-value</i>	<i>VIF</i>
perceived distinctiveness	0.40	4.19	84	0.01	1.11
commitment					
satisfaction					
investment					
comparison level for alternatives	-0.30	3.15	84	0.01	1.11

Note.  $F(2, 84)=19.83, p<.01, Adj.R^2=.30, n=87$

=12.24,  $p<.01, \eta_p^2=.12$ )。下位検定の結果, Figure 2 に示すとおり, 協調的志向性は特別観低群 ( $Adj.M=-.34$ ) よりも特別観高群 ( $Adj.M=.30$ ) の方が高かった ( $F(1, 91)=10.47, p<.01, \eta_p^2=.10$ )。また, 非協調的志向性は, 特別観低群 ( $Adj.M=.27$ ) よりも特別観高群 ( $Adj.M=-.24$ ) の方が低かった ( $F(1, 91)=6.42, p<.05, \eta_p^2=.07$ )。よって, 仮説 1 は支持された。

なお, 標準化得点では負値で示されることがあっても, 協調的志向性 (特別観低群:  $M=6.86$ , 特別観高群:  $M=7.48$ ) と非協調的志向性 (特別観低群:  $M=4.63$ , 特別観高群:  $M=4.06$ ) それぞれの素点が極端に低く偏っているわけではなかった。また, 特別観低群の相互依存諸変数の平均点を求めそれらとそれぞれの理論的中央値 (5点) との比較を行った結果, 彼らも関係自体にはある程度深く関与していることが確認されている。すなわち, 投資量 ( $ns$ ) を除き, 特別観低群であっても, 関係により満足しており ( $M=6.60, SD=1.67, t(44)=6.39, p<.01$ ), 代替肢の質はあまり高くなく ( $M=4.10, SD=1.59, t(45)=3.82, p<.01$ ), 関係へのコミットメントもより強い ( $M=5.73, SD=1.25, t(44)=3.91, p<.01$ ) ことが示され

た。よって, ここで取り上げた特別観低群の者がそもそも関係に関与していなかったとはいえない。

次に仮説 2 について検討するため, 協調的・非協調的志向性それぞれを基準変数として, 特別観, 関係満足度, 投資量, 代替肢の質, コミットメントを説明変数とする重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。その結果, Table 4 に示す通り, 関係に対する特別観が高いほど協調的志向性も高まる一方, 代替肢の質が高いほど協調的志向性は低まることが示された。また, Table 5 に示すように, 関係に対する特別観が高いほど非協調的志向性は低まる一方, 関係への投資量が大きく代替肢の質が高いほど非協調的志向性も高まることが示された。以上の結果より, 相互依存変数の影響を統制しても, 特別観は協調的志向性と非協調的志向性のそれぞれに対して有意な関連性を示し, 仮説 2 は支持された。

## 考 察

仮説はいずれも支持された。恋愛関係において特別観を高くもつ者ほど, 協調的志向性が高く, 逆に非協調的志向性は低かった。また, 恋愛関係における特別観の高

Table 5  
Uncooperative orientation as a function of perceived distinctiveness and variables of interdependence

	<i>b</i>	<i>t-value</i>	<i>df</i>	<i>p-value</i>	<i>VIF</i>
perceived distinctiveness	-0.43	4.37	84	0.01	1.26
commitment					
satisfaction					
investment	0.37	3.88	84	0.01	1.16
comparison level for alternatives	0.31	3.38	84	0.01	1.11

Note.  $F(3, 83)=15.14, p<.01, Adj.R^2=.33, n=87$

さが協調的・非協調的志向性に及ぼす影響は、相互依存諸変数が志向性に及ぼす影響を統制してもなお認められた。

#### 親密な関係における特別観のもつ効果

本研究の結果から、恋愛関係ではその関係を特別視するほど相手が協力的な場合に自身も協力的な態度や行動を示しやすいことが示された。これは問題で述べたように、排他的な意識が強いほど相手に対する気遣いを基調とした行動が促進されやすい(e.g., Hendrick & Hendrick, 1989; 長田, 1990; Rubin, 1970) ことが、協調的な志向性にも反映されたためだと考えられる。このようにメンバー間での協力的なやりとりを継続して行なうならば、それはお互いのサポート的な行為を促進したり、サポートの利用可能性を高めたりするだろう。ソーシャル・サポート研究が明らかにしているように、一般にサポートの利用可能性を高く知覚できる者ほど、心身の健康状態を高く保持することができる(浦, 1992)。したがって、親密な関係に対して当事者が高い特別観をもつことは、協調的な行動の継続を通じて関係内で得られるサポートの利用可能性を高め、結果的に当事者の健康に肯定的な効果をもつといえる。

他方、本研究では、恋愛関係において高い特別観によって相手が非協力的な場合に自身も非協力的に振る舞うことができないことも示された。その背景として、妥当性の検討でも示されたように、自身の恋愛関係を特別視する者ほど相対的に外部からのサポート取得が抑制されがちになることを指摘できる。特別観の高い者ほど恋愛関係の外部からあまりサポートを得られにくくなり、その結果、関係の相手が自分にとって嫌な振る舞いをとったとしても、文句を言うことなく耐えてしまいがちであると考えられるのである(相馬ら, 2003)。このように、相手の否定的な態度に対して積極的に対処できない個人は、相手の態度がストレス源として機能し精神的な適応が阻害される危険性が高い(例えば、橋本, 2005)。そ

ればかりか、非協調的志向性の抑制が関係内での相互作用に及ぼす長期的影響を考えるならば、それは、相手からの同様の振る舞いの繰り返しやエスカレートを導き、当事者により深刻な悪影響を及ぼしかねない(深澤ら, 2003; 相馬ら, 2004a, 2004b)。よって、特別観によって非協調的志向性が抑制されることは、ストレス源となりうる事象への対処を抑制したり、相手の否定的言動の繰り返しやエスカレートを助長したりして、結果的に特別視した当事者の精神的適応を阻害する可能性があるといえる。

以上のように、本研究の結果から、親密な関係に対する特別観が当事者の適応にとって肯定的に機能するだけでなく、否定的にも機能する可能性が示された。問題でも示唆したように、先行研究の知見を踏まえれば、親密な関係における特別観は関係の継続性を高める効果をもつと考えられる。例えば、代替関係に対する評価の切り下げを明らかにした研究では、親密な関係にいる者が代替となりうる関係を低く評価することによって恋愛関係の継続性を高めようとしていることが示されている(Lydon *et al.*, 2003; Lydon *et al.*, 1999)。また、親密な関係における排他的な意識や行動が関係の継続性を高めることも明らかされている(増田, 1994; Rusbult, Zembrodt, & Gunn, 1982)。これらのように代替となる関係を低く評価しようとしたり排他的な意識をもったりする背景には自身のもつ親密な関係を絶対的に価値のある特別なものとみなすことがあるといえ、その特別観が関係の継続性を高めることがこれまでの研究で示されてきたのである。また、従来の親密な関係に関する研究では、関係の安定性が、安心の源や自尊心の基盤として当事者の適応水準を高めるように機能するという、いわば肯定的な影響を主に明らかにしている(Kowalski & Leary, 1999; Liebowitz, 1983; Zeifman & Hazen, 2000; 大坊他訳, 2004)。よって、これまでの親密な関係をめぐる研究知見に基づけば、自身の恋愛関係を特別視することは、関係の安定化を通じて当事者に肯定的な効果をもつことが示唆され

る。このことは、特別観によって協調的な志向性が高められるという本研究の知見とも整合する。

しかしながら、本研究ではさらに関係を特別視することが当事者にとって否定的な効果をもたらす可能性も明らかにした。高い特別観をもつことで、関係の相手からの否定的言動に対する非協調的行動が抑制されることを示したのである。先にも述べたように、親密な関係で非協調的な行動が抑制されることは相互作用の悪化を通じて（深澤ら, 2003; 相馬ら, 2004a, 2004b）、当事者の心身の健康を阻害する（小西, 1999）。よって、間接的なながらも、親密な関係を特別視することが個人の精神的適応にとって否定的な影響をもつ可能性を示したという点において、本研究で得られた知見は親密な関係をめぐる従来の心理学研究に対して新たな示唆をもたらすものである。今後、本研究で示唆された親密な関係の特別観が当事者に否定的な影響をもたらす一連の過程について特別観から志向性への因果関係の検証も含めて実証的に検討を進めることで、親密な関係性が当事者の適応に及ぼす影響過程についてより一層深い理解を得ることが可能となる。

Berscheid and Walster (1978) は、恋愛と好意の質的な差異を指摘する中で、恋愛とは喜びと痛みの入り交じった状態であり、満足とともに苦悩によっても強められる要素であると述べている。つまり、恋愛関係をもつことは、そこにいる個人にとって必ずしも肯定的な影響だけではなく、否定的な影響をももたらすことを示唆している。この示唆を踏まえて本研究の結果を解釈すれば、恋愛関係に対して強い特別観を抱く者ほど、関係からそれらの両面的な影響を受けやすいといえるだろう。

### 特別観と相互依存諸変数との関連

仮説2の検討の結果、親密な関係での特別観は相互依存諸変数と独立して、協調的・非協調的それぞれの志向性に影響を及ぼした。すなわち、特別観のもつ効果は、特別視した関係に対する具体的な評価や選択比較水準となる他の関係に対する具体的な評価のもつ効果と独立していることが示された。このことより、特別観は、あくまでも特別視した関係に対する評価であり、その反面としてそれ以外の関係を照査することなく一概に低く評価する態度を導くことが強く示唆される。

Table 3 に示されたように、概念的には異なるものの実際には、ある関係を特別視する傾向と、特別視した関係とそれ以外の関係に対する具体的な評価の結果とは部分的に関連することが示された。とりわけ特別観と選択比較水準とに弱い負の関連性 ( $r = -.30, p < .05$ ) が示された

が、これは次のように説明できる。それは、ある関係を特別視することは、代替となりうる関係が具体的にどの程度魅力的なのかにかかわらず、一概に代替となりうる関係の魅力を低く評価することであり結果的に報告される選択比較水準も低くなりがちだという解釈である。そしてこの関連性が他の相互依存諸変数と特別観との関連にも反映され有意な相関関係が認められた可能性がある。もちろんこの可能性以外にも、ある関係を特別視してその関係を高く価値づけるならば、その関係に対してより投資を行う ( $r = .39, p < .05$ ) であろうし、高い価値づけは満足度に反映される ( $r = .47, p < .05$ ) ことも考えられる。そして、これらの関連性の結果、特別視するほどその関係を継続させようとする意思が高くなることも説明可能である ( $r = .45, p < .05$ )。

いずれの解釈が妥当であるにせよ、本研究の仮説2において検討対象としたのは、特別観と相互依存変数との直接的な関連性や独立性ではなく、それらの変数が協調的・非協調的な志向性に及ぼす機能の独立性であった。そして、重回帰分析の結果、特別観が志向性に及ぼす影響が相互依存諸変数によるものとは機能的に独立していることが確認された。上記のように特別観と相互依存諸変数にはある程度の関連性が認められるものの、VHF値が1.29以下と全般に低かったことから、本研究で得られた結果が多重共線性による可能性は小さい。よって、特別観が協調的志向性を促進して非協調的な志向性を抑制する効果は、代替肢の質の低さが協調的な志向性を高めたり、投資の少なさや代替肢の質の低さが非協調的な志向性を低めたりする効果とは独立するものであることが示されたといえる。これらの結果と、親密な関係の当事者の適応水準を高く保つ上で協調的な志向性と非協調的な志向性をともに高くもつことが必要であること（相馬・浦, 2001）を考え合わせれば、親密な関係における特別観は関係内での個人の振る舞いへの影響を通じて個人の適応に影響しうると考えられ、特別観の効果に注目することには一定の意義があるといえる。今後、さらなる検討を進める必要がある。

### 今後の課題

本研究で得られた結果を踏まえ、今後さらなる検討を要する点として次の3点をあげる。

一つ目は、予想しなかった結果として、今回、協調的志向性と非協調的志向性に負の関連性 ( $r = -.41, p < .01$ ) が認められたことに関連する。本来、これらの志向性は、相手が協力的な態度をみせた場合か非協力的な態度をみせた場合かのいずれかの状況での行動のとりやすさを意

味している。よって、概念的に独立したものであり、このことは経験的にも支持されてきた(相馬・浦, 2001; 相馬ら, 2004a, 2004b; 松尾, 2003)。それにもかかわらず、今回負の関連性が示されたのは、本研究で検討対象とした恋愛関係や友人関係の中に、コミュニケーション・パターンの固定化された関係が含まれていたためかもしれない。何らかのきっかけによって、協調的行動か非協調的行動のいずれか一方がとられやすくなり、他方がとられにくくなるような関係が含まれていた可能性がある。そうであれば、今後、そのきっかけとなる要因を同定するとともにそれらと志向性間の関連性を明らかにし、その上で先行研究(相馬ら, 2004a, 2004b)で示された志向性が個人の適応にもたらす効果がどのような関係性においても認められるのかを確認する必要がある。

二つ目は、本研究で得られた知見の一般化可能性と応用可能性に関する点である。本研究では恋愛関係にある者を対象として、特別観が協調的・非協調的志向性に及ぼす影響が明らかにされた。相馬ら(2004a, 2004b)の研究では、非協調的な行動が抑制されることの否定的な効果は、恋愛関係だけでなく、夫婦関係においても認められることが示されている。すなわち、非協調的な行動をとれないことが夫婦間暴力の促進因となることが示されているのである。したがって、夫婦関係においてなぜ暴力被害が長期化しうるかという問題の解決策を考える上で、今後特別観による非協調的志向性の抑制が夫婦関係においても確認されるか実証的に検討する必要がある。むしろ、デートDVの問題(例えば、山口, 2003)にみられるように未婚者における親密な関係でも暴力が長期化しやすいことはしばしば指摘されており、その背景要因の一つとして特別観による非協調的な志向性の抑制がある可能性を示唆したという点で、本研究の知見は実践的な問題へのインパクトをもつ。

最後に、本研究では恋愛関係における特別観の相対的な違いによって、関係内での協調的な志向性と非協調的な志向性の程度が異なることを示した。そして、先行研究の知見と考え合わせれば(相馬ら, 2004a, 2004b)、特別観によって非協調的な志向性が低下することが当事者にとって否定的な効果をもたらす可能性があることをここまで考察してきた。したがって、今後は、なぜ親密な関係にある者の特別観の高さにばらつきが生じるのかについて検討すると共に、どうすれば特別観のもつ否定的な影響を緩和しうるのかについて検証する必要があるだろう。その場合、特別観が協調的な行動をとりやすくすることを考慮すれば、特別観そのものを低下させる条件ではなく、特別観が高くとも非協調的な志向性が抑制さ

れない条件を探ることが重要である。これらの検討の際には、本研究で用いた特別観尺度が構成概念を十分に代表したものとなっているかどうかを合わせて検討する必要がある。今回の検討では、用いた特別観尺度の信頼性や妥当性は確認されているものの、特別観という構成概念を限られた項目で測定していたためである。また、本研究では特定の評価領域にかかわらず全般的な評価においてある関係を特別視することの効果について論じてきたが、領域毎での特別視の効果についても検討する余地が残されている。

#### 引用文献

- Argyle, M., & Furnham, A. (1983). Sources of satisfaction and conflict in long-term relationships. *Journal of Marriage and the Family*, 45, 481-493.
- Berscheid, E., & Walster, E. (1978). *Interpersonal attraction: 2nd*. New York: McGraw-Hill.
- Bowlby, J. (1973). Attachment and loss: Vol. 2. Separation: *Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Davis, K. E. (1985). Near and dear friendship and love compared. *Psychological Today*, 19, 22-30.
- Drigotas, S. M., Rusbult, C. E., & Verette, J. (1992). Should I stay or I go?: A dependence model of breakups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 62-87.
- Franiuk, R., Cohen, D., & Pomerantz, E. M. (2002). Implicit theories of relationships: Implications for relationship satisfaction and longevity. *Personal Relationships*, 9, 345-367.
- 深澤優子・浦 光博・相馬敏彦 (2003). 親密な関係における暴力についての検討—被害者の行動がパートナー暴力に与える影響に注目して— 第50回日本グループ・ダイナミクス学会大会, 98-99.
- 橋本 剛 (2005). ストレスと対人関係 ナカニシヤ出版
- Hendrick, C., & Hendrick, S. S. (1989). Research on love: Does it measure up? *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 784-794.
- Johnson, D. J., & Rusbult, C. E. (1989). Resisting temptation: Devaluation of alternative partners as a means of maintaining commitment in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 967-980.
- 小西聖子 (2001). ドメスティック・バイオレンス 白水社
- Kowalski, M., & Leary, M. R. (1999). *The social psychology of emotional and behavioral problems: interfaces of social and clinical psychology*. Washington: American Psycho-

- logical Association.
- Liebowitz, M. (1983). *The chemistry of love*. New York: Berkeley Books
- Lydon, J. E., Fitzsimons, G. M., & Naidoo, L. (2003). Devaluation versus enhancement of attractive alternatives: A critical test using the calibration paradigm. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *29*, 349–359.
- Lydon, J. E., Meana, M., Sepinwall, D., Richards, N., & Mayman, S. (1999). The commitment calibration hypothesis: When do people devalue attractive alternatives? *Personality and Social Psychology Bulletin*, *25*, 152–161.
- Martz, J. M., Verette, J., Arriaga, X. B., Slovik, L., Cox, C., & Rusbult, C. E. (1998). Positive illusion in close relationships. *Personal Relationships*, *5*, 159–181.
- 増田匡裕 (1994). 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, *34*, 164–182.
- 松井 豊 (1990). 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, *33*, 355–372.
- 松尾太加志 (2003). 携帯メールでのメッセージ交換行動と対人関係における協調・非協調志向との関連 日本人間工学会シンポジウム「ケータイ・カーナビの利用性と人間工学」
- Miller, R. S. (1997). Inattentive and contented: Relationship commitment and attention to alternatives. *Journal of Personality and Social Psychology*, *73*, 758–766.
- Murray, S. L., Holmes, J. G., & Griffin, D. W. (1996). The self-fulfilling nature of positive illusions in romantic relationships: Love is not blind, but prescient. *Journal of Personality and Social Psychology*, *71*, 1155–1180.
- Murray, S. L., & Holmes, J. G. (1997). A leap of faith? Positive illusions in romantic relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *23*, 586–604.
- 中村佳子 (2002). 二者関係におけるサポートの期待と受容の不一致の影響に関する研究 広島大学大学院生物圏科学研究科博士論文 (未公開).
- 奥田秀字 (1994). 恋愛関係における社会的交換過程—公平, 投資, および互恵モデルの検討 実験社会心理学研究, *34*, 82–91.
- 奥田秀字 (1997). 人をひきつける心—対人魅力の社会心理学— サイエンス社
- 長田雅喜 (1990). 対人魅力の研究と愛の問題 心理学評論, *33*, 273–287.
- Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, *16*, 265–273.
- Rusbult, C. E. (1983). A Longitudinal test of the investment model: The development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, *45*, 101–117.
- Rusbult, C. E., Johnson, D. J., & Morrow, G. D. (1986). Impact of couple patterns of problem solving on distress and nondistress in dating relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, *50*, 744–753.
- Rusbult, C. E., Martz, J. M., & Agnew, C. R. (1998). The Investment Model Scale: Measuring commitment level, satisfaction level, quality of alternatives, and investment size. *Personal Relationships*, *5*, 357–391.
- Rusbult, C. E., Zembrodt, I. M., & Gunn, L. K. (1982). Exit, voice, loyalty, and neglect: Responses to dissatisfaction in romantic involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, *43*, 1230–1242.
- Simpson, J. A. (1987). The dissolution of romantic relationships: Factors involved in relationship stability and emotional distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, *53*, 683–692.
- 相馬敏彦・深澤優子・浦 光博 (2004a). 「愛とは堪え忍ぶこと」の陥穽—親密な関係における協調的・非協調的志向性が暴力被害の抑制に及ぼす影響— 日本グループ・ダイナミクス学会第 51 回大会, 74–75.
- 相馬敏彦・落合麻子・深澤優子・浦 光博 (2004b). 恋人・夫婦間暴力被害の抑制に及ぼす対人的影響—関係内での協調的・非協調的志向性と関係外部からのサポートの影響 行動科学, *43*, 1–7.
- 相馬敏彦・浦 光博 (2001). 対人関係の進展における接近・回避志向性 日本グループ・ダイナミクス学会第 49 回大会発表論文集, 86–87.
- 相馬敏彦・浦 光博 (2002). 恋愛関係の排他性に及ぼす一般的信頼感とサポートの送り手の専門性の効果—恋愛関係のネガティブな側面を緩和する— 第 66 回日本心理学会大会発表論文集, 188.
- 相馬敏彦・浦 光博 (2007). 恋愛関係は関係外部からのソーシャル・サポート取得を抑制するか—サポート取得の排他性に及ぼす関係性の違いと一般的信頼感の影響— 実験社会心理学研究実験社会心理学研究, *46*, 13–25.
- 相馬敏彦・山内隆久・浦 光博 (2003). 恋愛・結婚関係における排他性とそのパートナーとの葛藤時の対処行動選択に与える影響 実験社会心理学研究, *43*, 75–84.

- Sprecher, S., & Metts, S. (1989). Development of the "Romantic Beliefs Scale" and examination of the effects of gender and gender-role orientation. *Journal of Social and Personal Relationships*, 6, 387-411.
- Thibaut, J. W., & Kelley, H. H. (1959). *The social psychology of groups*. New York: Wiley.
- 浦 光博 (1992). 支えあう人と人 サイエンス社
- Van Lange, P. M., & Rusbult, C. E. (1995). My relationship is better than—and not as bad as—yours is: The perception of superiority in close relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 32-44.
- 和田 実 (1994). 恋愛に対する態度尺度の作成 実験社会心理学研究, 34, 153-163.
- 山口のり子 (2003). デートDV防止プログラム実施者向けプログラム—相手を尊重する関係をつくるために— 梨の木舎
- Zeifman, D., & Hazen, C. (2000). A process model of adult attachment formation. In Ickes, W., & Duck, S. (Eds.), *The Social Psychology of Personal Relationships*. New York: Wiley. 37-54. (大坊郁夫・和田 実 (監訳) (2004). パーソナルな関係の社会心理学 北大路書房)

## The influence of perceived distinctiveness in romantic relationships on the cooperative and uncooperative orientations of lovers

TOSHIHIKO SOUMA (*Faculty of Humanities, Kyushu Women's University*)

MITSUHIRO URA (*Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University*)

In this study, we examined whether the perceived distinctiveness in romantic relationships affects how romantic partners act toward their partners. Four-hundred and seventy-four undergraduates participated in a questionnaire survey. It was found that the level of perceived distinctiveness bolsters cooperativeness, while inhibiting uncooperativeness amongst partners. Furthermore, the influence process of perceived distinctiveness on these orientations was found to be independent of interdependence variables (comparisons for alternatives, satisfaction, investment, and commitment; see Rusbult, 1983). These results suggest romantic partners who perceive their relationship as possessing greater distinctiveness may find it difficult to undertake uncooperative actions. We discussed the possibility that perceived distinctiveness of romantic relationships could result in maladaptation between the partners.

**Key Words:** perceived distinctiveness, romantic relationship, cooperative/uncooperative orientations, exclusivity

( 2006年11月21日受稿 )  
( 2008年 6月 4日受理 )